

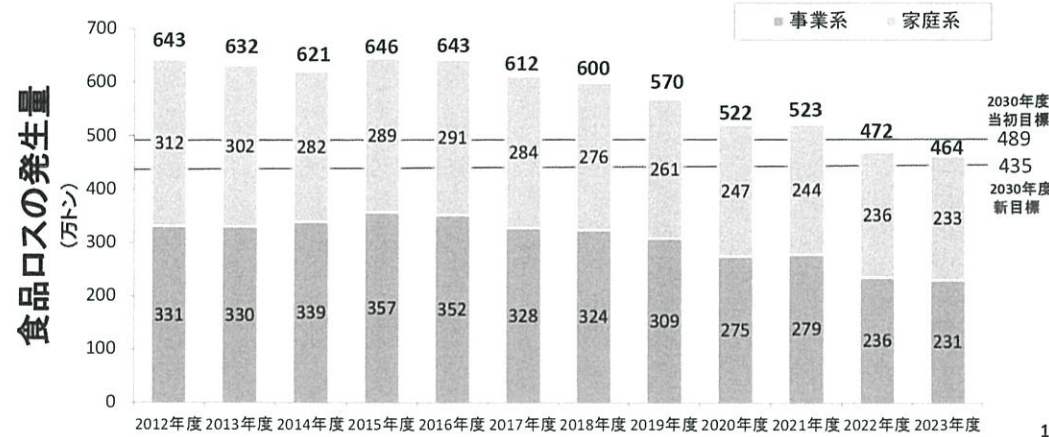




# 小論文 I 資料

## 我が国の食品ロスの発生量の推移

- ✓ 平成24年度より、食品ロスの発生量の詳細な推計を実施
- ✓ 令和5年度は約464万トンと、前年度から約8万トン（約1.7%）減少
- ✓ 内訳は、事業系が約5万トン（約2.1%）、家庭系が約3万トン（約1.3%）減少
- ✓ 発生量全体では、昨年度2030年度半減目標を達成。
- ✓ 今後事業系は2000年度比で60%削減、家庭系は半減（2030年度を待たずに早期達成）を目指す。 ※2023年度時点での削減率：事業系57.8%、家庭系46.1%

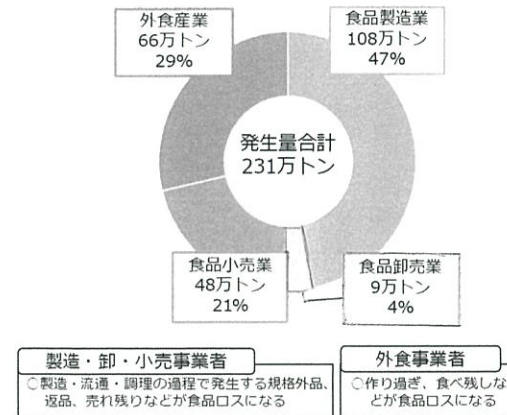


1

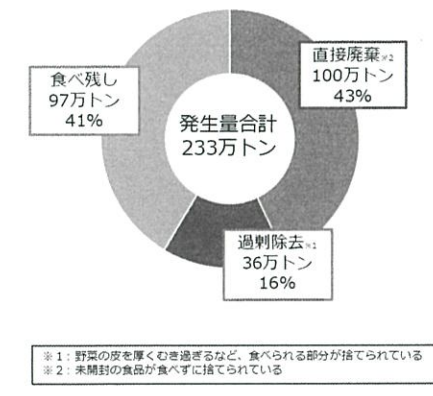
## 発生要因の内訳

- 我が国の食品ロスは464万トン ※農林水産省・環境省「令和5年度推計」
- 食品ロスのうち事業系は231万トン、家庭系は233万トンであり、食品ロス削減には、事業者、家庭双方の取組が必要。

### 事業系食品ロス（可食部）の業種別内訳



### 家庭系食品ロスの内訳



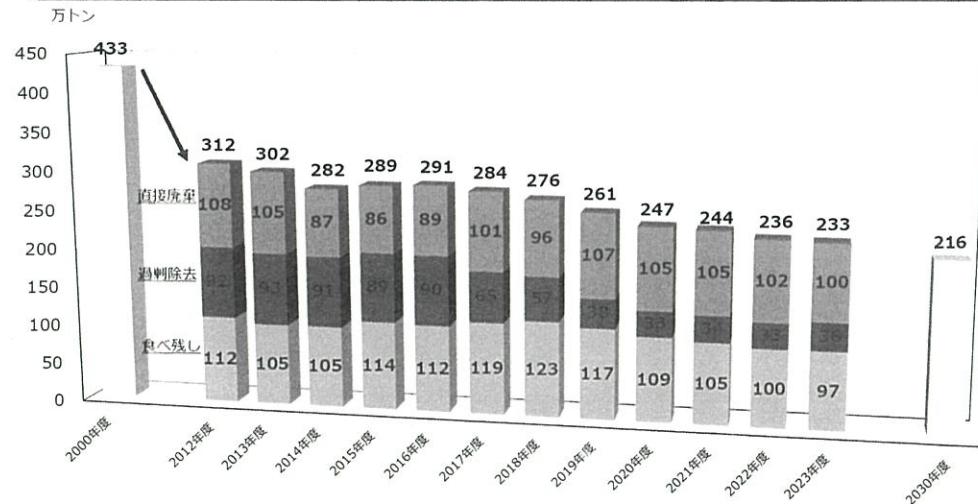
※端数処理により合計と内訳の計が一致しないことがあります。

2

## 家庭系食品ロス量の削減目標と推移

【目標】2000年度(433万トン)比で、2030年度までに半減させる(216万トン)  
※2030年度を待たずに早期達成

2012年度以降、全体では減少傾向  
近年は全体として減少する中、特に直接廃棄、食べ残しは減少傾向



環境省 環境再生・資源循環局にて推計

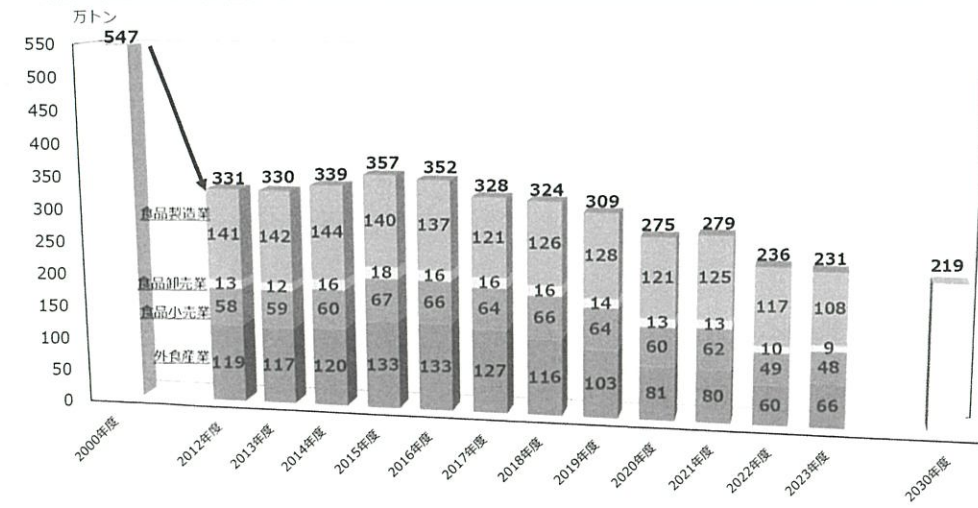
※端数処理により合計と内訳の計が一致しないことがあります。

3

## 事業系食品ロス量の削減目標と推移

【目標】2000年度(547万トン)比で、2030年度までに60%削減させる(219万トン)

2012年度以降、全体では減少傾向  
近年は全体として減少する中、特に食品製造業は大きく減少



農林水産省 大臣官房 勤事室・食品産業部にて推計

※端数処理により合計と内訳の計が一致しないことがあります。

4





## 小論文Ⅱ 資料

最後に多様性について考えてみよう。多様性とは社会的差異を意味するが、文化的差異だけでなく、年齢、性別、民族、障害、言語、性的志向性、社会的階級等の社会的カテゴリーに関わるものである(Blaine, 2007)。私たちは、年齢、民族アイデンティティ、性別、集団、経済状態、宗教など多様な社会的状況と社会的差異の中に埋め込まれて生きているため、多文化社会では個人や集団の間で、違いを生み出すさまざまな文脈や状況の中で考慮していく必要がある。私たちはその文脈や状況の中で人々の関係性を理解する必要があるが、とりわけ異文化接触においてはそれが重要である。異文化接触は、文化と文化の接触であると同時に、個人と個人との接触であるため(加賀美 2007a, 2019a)、どういう状況に置かれているかによって個人と個人の関係が異なってくる。日本人住民も多様な文化的背景を持つ外国人住民も、文化的多様性(国籍、民族等)の要素だけでなく、性別、宗教、年齢、障害など、個人や集団の間で違いを生み出す可能性のあるあらゆる要素を多文化社会においては文脈の中で考慮していく必要がある。

グローバル社会では、取り巻く状況や文脈、社会、文化、時間に変化することが前提となる。そうするとマジョリティ側にいる自分がマイノリティ側の自分になる可能性を常に持っているため、マイノリティとマジョリティ、日本人住民と外国人住民という二項対立で考えることは意味のないことになる(加賀美 2012)。特に、オールドカマー、日系人、国際結婚とその家族に象徴されるように、外国につながる人々は、家族の個々の様相によって異なり多種多様である。同じ家庭内でもその人のおかれた場や状況、文化、言語、ア

イデンティティもそれぞれであり、それぞれの家族や人々をひとくくりにすることはできない。

たとえば、文化移行のように空間軸の変化を考えてみよう。私たちは海外留学や転勤のため外国生活を送ることになれば、これまでマジョリティ側にいた自分がまたたくまに文化的・言語的マイノリティ側の立場に移行してしまう。また、加齢のように時間軸の変化では、私たちはいずれ誰でも高齢者となる日が来る。これまで当たり前にできたことが身体的にも精神的にもできなくなるかもしれない。このように、文化移行と加齢による変化などを考えると、マイノリティとマジョリティは固定化されていないことがわかる。私たちはいつでもマイノリティになりうる、変化しうる存在であり、多文化社会における多様性とは、いつでも変化しうる動的な多様性である。このことを考えると、マイノリティは必ずしも外国人住民、外国につながる人々だけであり続けることはなく、時間によっても、空間や場所によっても、文脈によっても、流動的なものになる可能性がある。私たちは、今、そうした社会に生きているといえる。

(出典：加賀美 常美代 (2025)、『多文化共生論【第2版】—多様性理解のためのヒントとレッスン』、明石書店、31-32)